

一般部門 選評一覧（二次選考を担当した読者選考委員からの選評の抜粋）

目次（タイトル五十音順）	頁
あなたに捧げるパステーション	1
いなり京町家の恍惚ごはん	1
永禄、元亀、天正・京都集金大作戦	1
エキウラのシゲロ	1
エトランゼ	1
乙女	1
冥界（カロン）の橋	2
桓武の都	2
京都嵐山河童プロポーズ大作戦	2
京都シマバラ・ラブソディー	2
京都所司代探索録——上方からの軍船	2
京都にての物語	2
傀儡子の疾風	3
傾国老人	3
恋とコーヒーと不意の漣	3
御幸町ウエディングロード	3
子雀の行方	3
昏迷の葉～右近少将源佑成の事件簿～	3
三十年目の約束	4
しのぶもちずり	4
十六年の悪逆	4
しるひとは、しるぞかし	4
世界を車窓から	4
たそがれにかぎろいの立つ見えて	4
月並み姉妹	5
月の船星の林	5
定家始末記	5
毒を食らわば	5
はちみつレモン	5
東ドイツカメラ専門店	5
ひこうき雲	6
伏見参拝	6
平安京の人魚	6
ぼ・ざーる西陣	6
本阿弥異聞	6
「舞え舞えかたつむり」－白拍子・暁星の明けない夜はない？－	6
室町風姿伝	7
料理人	7
ルーシー・イン・ザ・スカイ	7

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
あなたに捧げる パスティーシュ	<p>○面白かった。文章に力があり、文豪のエピソードもリサーチされており展開に無理がなく読みやすかった。臨終間近に託された遺言が物語の発端にインパクトを与え、後半にかけての展開が盛り上がり、全体の構成が良かった。</p> <p>○ミステリのように伏線の散りばめ方が上手い。</p> <p>○養父が交流していた日本文学界の巨匠たちとのやりとりが面白く、興味をそそられながら作品に引き込まれた。</p> <p>○遺言に背いて行動する主人公の心情描写が良い。言い訳をしつつ時に自分に腹を立てたり後悔したり、物語の展開と主人公の行動と気持ちがリンクしている。</p> <p>○題名にひきつけられ「つかまれて」しまった。</p> <p>○! ?などの記号がきわめて少なく、用いられている場合もその効果がきちんと感じられる。それゆえ格調高く感じられる。</p>	<p>○なぜ未完の稿を焼けと言ったのか、主人公が作中ずっと問い続ける割に、答えとしては示されずに終わってしまった。ミステリをにおわせ過ぎかなと思う。</p> <p>○「儂きものの美に対する憧憬」を物語の中心に据えているように思うのだが、その想いがどのように登場人物の遺言と結びついているのか分りにくく感じた。そのため、主人公が送り火を見つめているときの心情が手取りにくく、肝心の最後で物語の全体が一気にぼやけてしまった感があった。</p> <p>○三島由紀夫にまつわるエピソードがうまく活かされていない。また、無用なエピソードや設定の無理を感じる。</p> <p>○タイトルの「パスティーシュ」が分りにくく凝りすぎている。</p>
いなり京町家の恍惚こほん	<p>○京都の文化・歴史と現代の「食」の問題がとても上手く融合していて、読み進めるにつれて、どちらに対する興味や知識もどんどん深められていった。</p> <p>○マンガ的な描写で、情景をイメージしやすく、読みやすかった。京料理や町家の描写は、読んでいて思わずわくわくするほどに丁寧であり、また文学について細かく話すシーンも、作者の方の熱量が感じられて素敵だった。メインテーマである「食の大切さ、伝統とは何か」といったことも、すんなりと受け止められた。粗末なものばかり食べている私には、結構響いた。</p> <p>○軽やかに読むことができ、それでいてしっかりと心に残る前向きさが良かった。読み終えた後、続きを読みたいと思った。</p>	<p>○食文化、食育、日本文化、神道・・・伝えたいと思っているテーマが多すぎる。</p> <p>○キャラクターの表現が少し浅いと感じた。言ってしまうと、「よくある」という印象で、感情移入をすることは難しかった。</p> <p>○キャラクターの話し方、過剰な三点リーダーの使用、改行の多用、また地の文の視点が頻繁に変わることによって少々読みにくい。</p> <p>○日本文化、日本食の素晴らしさを前面に出し過ぎと感じた。</p>
永祿・元龜・天正・ 京都集金大作戦	<p>○「短気で他人の指図は受けぬ、待つのは嫌い」という信長の性格と思慮深さ、群雄割拠の大名諸氏の動きや光秀の策略、戦の場面描写が秀逸である。特に比叡山侵攻と延暦寺が燃ゆる様はその光景が目につかぶ。</p> <p>○登場人物が個性豊かで楽しみながら読むことができた。</p> <p>○織田信長の武将としての戦いを、家老の視点から経済的角度で照らし直すという試みは面白い。手堅く物語を組み立てている構成力は十分評価に値する。</p> <p>○作者が史実に基づき、多くの資料を調べたことがうかがえる。</p> <p>○歴史を学ぶ子ども達も、この作品のような視点で学んでもらうと興味の持ち方が変わるだろうと思った。</p>	<p>○描きたかったのは主人公の一生なのか、数ある戦の別解釈なのか、絞りきれないように感じる。少数の戦などに話を絞り、いかに資金繰りに苦戦したのか、上層部との意見の相違などを面白おかしく描いた方が良かったと思った。</p> <p>○ラストの部分をもう少し丁寧に書いてはどうかと思った。</p> <p>○主人公の内面や人物像が十分に描かれていない。</p> <p>○基本的に説明調なので、説明の中に適したセリフを当てはめた作品という印象だった。会話シーンの中で自然に状況を読者に提示出来る場面を増やすなど、もう一工夫が欲しいところである。</p>
エキウラのシゲロ	<p>○一昔前の京都に住む在日コリアンの人々の生活ぶりを、できるだけ肌身感じられるように丁寧に描こうとしていたので、純文学としての完成度も非常に高いように感じた。</p> <p>○私小説のように感じられるほど内容が濃く、一人一人の丁寧な描写が印象的。この作者でなければ書けないであろう世界であった。</p> <p>○多数の登場人物をよく書き分けている。戦後の混沌とした時代の京都駅裏の様子、情景描写がリアルで上手い。</p> <p>○文章力がある。分かりやすく状況説明もなされている。</p> <p>○読んでいてユーモアもあり、暗さを感じさせず、さりとして重厚な作品に仕上がっていた。</p>	<p>○主人公の65年後が折角描かれているのだから、もっとその部分を掘り下げたり過去とつなげるような書き方をしても良かったのではないと思う。現在と過去との対比としては良いが、弱い。</p> <p>○韓国・朝鮮語が多くリアリティは出たが、読みにくくなってしまったように思う。また、登場人物が多すぎる。</p> <p>○京都駅裏を題材にし、当時の様子や描写がよく描けていたが、アイデンティティーについて読者に問かける手法、話の構成などがよくあるパターンを脱しきれず残念。</p>
エトランゼ	<p>○京都を離れようとする場面から始まって、京都に越して来るところまで時間がさかのぼるという展開が、効果的で思わず引き込まれた。</p> <p>○北白川を舞台に選んだことが実に良い。京都という地の書き方や、自分の生い立ちの記述が分り易く、頭の中に情景が自然と浮んだ。</p> <p>○物語中盤から狂気の沙汰に染まっていく主人公の様子が恐怖を感じるほどよく描けている。</p> <p>○転勤に対する拒否反応や夫に対する不信などの書き方がとても上手である。</p> <p>○タイトルの“異邦人”という意味にちゃんとおさまっている。</p> <p>○暗い、そして、面白い。さらに言うなら妖艶でもある。それでいてどこか上品で、いやらしさが感じられない。</p>	<p>○書き出し(物語の始め)が最も現在に近い目線で、回想形式をとっているが、ラストシーンで1番最初に繋がることもなく違和感がある。</p> <p>○野犬という設定が、現代感覚で唐突な気がした。もっと身近な事、物(不審者やカラス)に置き換える方がピンと来る。</p> <p>○全体的に夫婦の会話とやりとりに違和感がある。主人公の発言と行動が冗談でも冷淡でもなく白々しい。話に入っていけない。</p> <p>○精神崩壊していく主人公がよくあるパターンで新鮮さが感じられない。主人公もその夫も登場人物に魅力がなく感情移入できない。常軌を逸した主人公の描写は見事だが、結局作者が何を伝えたいのか分からなかった。</p>
乙女	<p>○主人公の懺悔する気持ちや感情が正直に生々しく描けている。</p> <p>○友人との交流は無理なく自然に描かれている。だから、友の入院・突然の死、その後の喪失感は素直に読める。</p> <p>○お葬式以降の精神が崩壊していく様が物語に展開を見せている。</p> <p>○夢にうなされるシーンは、特に緊迫感があって迫ってくる。</p> <p>○主人公の発想や感情表現が豊かで、面白い。独特の世界観がある。</p> <p>○実に幻想的で美しい小説だと思った。</p>	<p>○死後の世界での主人公と登場人物とのやりとり、生き返ってからの会話がよくある話で、既視感がある。もう少し思い切った展開や会話が欲しかった。</p> <p>○夢の中で様々な心像が展開され、主人公の内面が変わっていくことには納得いくが、それらがあまりに滑らかに語れているため、「いつの間に立ち直ったのか」、「結局どういう変化が訪れたのか」を感じ取りにくいように思う。</p> <p>○タイトルがインパクトに欠け、せつかくの中身を生かし切れていない気がする。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
冥界（カロン）の橋	<p>○東京で育った主人公が読者を置いてきぼりにしないよう、良い具合に問を出したり、他の登場人物が教えてくれたりする仕組みも効果的に使おうとしていて良かった。</p> <p>○京都の説明を含んだ地理的描写が上手い。建造物や歴史、文化など、京都にまつわる描写が数多く、丁寧に盛り込まれており、京都に対する愛情を感じることができた。</p> <p>○地の文、会話文とも変なクセはなく、読みやすかった。基本がしつかりできて印象を受けた。さくさくと読み進めることができて、主人公になったような気分で、この小説に書かれた世界に入り込みやすい。</p>	<p>○全体的に、話が急展開で、問題の答えがあっさり簡単に見つかりすぎた印象。もう少し設定のつじつまを合わせ、まとまりが必要ではないか。</p> <p>○人物の造形が曖昧（描き分けが薄い）。</p> <p>○恋愛、そして性の言及も多かったが、もう少し丁寧に書いても良いのではと思った。</p> <p>○京都が舞台であるはずなのに、ほとんどすべての人物がきれいな標準語なのが気になった。</p>
桓武の都	<p>○謎を解きながら真相に迫っていく進め方が分かりやすい。小さな歴史の手がかりからここまで話が広がり、読み手の心に身近に残ったところが素晴らしいと思った。</p> <p>○会話のテンポが良くて気づいたら読み終えていた。ラストのシーンでは泣きそうになりながら読んでいて、主人公に幸せになってほしいと祈っていた。</p> <p>○宮中の政治とは無関係な位置にいる女性と子供たちが作り上げるどこか軽妙な作品の雰囲気は、一種のヤング・アダルト小説的な空気を纏っており独特の世界観が面白い。</p> <p>○長岡京を題材として取り上げた作品は多くないと思うのでとても興味深く読んだ。</p>	<p>○作品のクライマックスからラストにかけては主人公や他の人物の内面的変化や成長の描写が欲しい。</p> <p>○人物描写は、背格好や顔の特徴、その人物ならではの癖などがあると、よりその魅力を引き出せるように思う。登場人物がせつかく魅力的なのに非常に勿体ないと思う。</p> <p>○登場人物の軽妙な会話に馴染めなかった。</p> <p>○物語が進むにつれての「京の時の流れ・季節感」をもっと描写して欲しいと思った。本題の怨霊探索以外の京の魅力（例えば市の賑わいやそこに暮らす人々とのやりとり、京ことばでの表現）などを取り入れられたらもっと面白くなるのではないかなと思った。</p>
京都嵐山河童プロポーズ大作戦	<p>○河童が主人公という点からして既に興味深い。また、設定もとてもユニークな上、比喩も斬新なものが多かったので面白く感じられた。</p> <p>○人間でない河童を描くことで、逆に人間を描くことができています。</p> <p>○「自分の考えた世界」の設定が緻密に練られている作品で人を惹きつける力がある。</p> <p>○物語の起承転結が分かりやすく、文章もきれいにまとまっていると感じた。</p> <p>○プロポーズを決行するシーンで主人公ではなく、受ける側の内面へと語り手の焦点が移った点も面白く感じた。読んでいて温かい気持ちになれる作品だった。</p>	<p>○河童たちが人間世界同様SNSを利用する設定自体は非常に面白いが、ネット社会のリアルさをもう少し追求して欲しい。</p> <p>○おみくじでそんなに人生が変わるだろうか。因果関係がもっと伝わるように表現して欲しい。</p> <p>○主人公のマイナス面が目立ち過ぎており、読んでいて痛々しかったし、彼を肯定する登場人物に対する違和感が拭えなかった。登場人物の言動に違和感を持つと、それだけでも作品を楽しむことが難しくなる。</p> <p>○比喩表現や修飾文、説明の多い文章等が気になり読み解くのに時間が予想外にかかった。設定が面白いので勿体ない。外国の論文の直訳を読んだ気分だった。</p>
京都シマバラ・ラプソディー	<p>○章立てで整理されているので話が分かりやすく進める。</p> <p>○歴史の説明が上手く、嶋原太夫を題材に選んだのはオリジナル性があると思う。知らないことが多く、太夫に興味を持った。歴史背景、太夫情報もよく調査されて物語に活かされている。</p> <p>○登場人物の凛とした美しさの表現がよく描けている。京言葉と相まって気品が漂う姿が浮かんだ。</p> <p>○面白くて一気に読めた。よく調査したことが物語を骨太なものに仕上げ、登場する人物全員が良い人で京都が好きになるお話。少々出来過ぎな点もあったが、読後感も良く、太夫を見に行きたいと思わせてくれる。京都の余韻がいつまでも残る良い作品。</p>	<p>○歴史背景の説明が長文すぎる箇所がある。しかし、そして、すると、の連続説明で退屈させる。主人公の語りで工夫できるのではないかな。会話や物語の流れも不自然で、「書きたいこと」に合わせて会話や物語が進展させられている印象を持った。</p> <p>○やや“御都合主義”的である。特に嶋原と深い関わりのあるという人物との出会い。もうワン・クッション置いた方がわざとらしさを回避できるだろう。</p> <p>○登場人物の名前が京都にちなんでいることは伝わるが、やや稚拙な印象を受けてしまう。</p> <p>○文体にリズムがないために、読者が波に乗ることがおそらく難しく、読者が作品の世界に入りこむことができない。</p>
京都所司代探案録 ―上方からの軍船―	<p>○序章の書き出しは読み手の興味を大きく刺激するもので、この物語の世界へグングン引き込まれていった。</p> <p>○物語のプロットが明快で読み進めやすい。「安宅船事件の発生とその解決」という大枠を守りつつ、その中で世界観や人物を描き切る技量には感心させられた。</p> <p>○人物の性格や口調などの描き分けが出来ていて、かつどの人物にもそれぞれのバックボーンや現在の立場が示唆されることによって、生きた一人の人間として描かれている。</p> <p>○各章の分量が適切であり、少々難解などころには、現代風の解説を付けてあり、とても読みやすい体裁だった。</p>	<p>○物語の最も重要な謎解きの結論部分が若干弱かったのではないかなと思った。物語が進むにつれて読み手を引き込ませて欲しい。</p> <p>○登場人物が多くて誰が誰なのか上手くつかむことができなかった。</p> <p>○時制がバラバラで言葉も難しく読み進めるのが難しかった。読み手を意識すると良くなるのではないかなと思った。</p> <p>○地の文で随所に挿入される、現代の視点からの解説は、やや説明過多でかえって作中世界への没入を妨げている印象があった。</p>
京都にての物語	<p>○様々な京都の観光地について、色々作中に登場したので興味を惹かれた。読んだ後に、もっと京都の街や歴史について知りたいと思わされる。</p> <p>○京都駅の片隅で中年男性が小説を使って観光地紹介するというシュールな空気が面白い。作品の中で小説が登場するというスタイルは挑戦的で面白い。</p> <p>○最後は「そう来たか！」と思わせる意外性のある展開。</p> <p>○キャラクターが特徴的でイメーজしやすい。</p> <p>○「読むガイドマップ」のような、何とも言えない奇妙で温かな物語だった。入れ子構造になっていて、登場人物4人との出会いを物語にしたのか、4人はそもそも物語の中に閉じ込められた存在だったのか、様々な解釈ができそうな作品だった。</p>	<p>○作中小説に関して、その内容の大半は観光地の説明が多く、小説としてはそこまで説明しなくていいからキャラクターを動かして欲しくなった。登場人物に深みを感じづらく、彼らの名前と容姿、特徴を頭の中で覚えておくのが難しかった。</p> <p>○熟語が多用され彼らが難解な頭をもっているように見え、言葉が上滑りしている印象。読み手が頭の中で文章を噛み砕き読み進めねばならず、物語に入りこむのを妨げられてしまうのが勿体ない。</p> <p>○マイナーな場所を集めるのは良いが、メジャーな場所の話も入っているとメリハリが付く。</p> <p>○短編ゆえ展開が急ぎ足になるのは仕方ない部分もあるが、そこを1編1編満足感を与えるのも腕の見せ所。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
傀偶子の疾風	<p>○冒頭から読者を惹きつけ、飽きさせることがない展開で、結末も予想できず見事だった。</p> <p>○主人公の怒りや欲望、葛藤や決意を描き出す心理描写が全編を通して優れており、先を読みたくなる力強さがある。</p> <p>○情景描写、人物描写が非常に豊かで、音、におい、色、息づかいなども鮮やかにイメージできた。</p> <p>○歴史の表舞台を闊歩する権力者たちの影で、隠れながら生き、そして死んでいかざるを得なかった人間の側にこそ光を当てていこうとする書き手の態度は終始一貫しており、作品内に独特の陰影ある世界観を創り上げることに成功している。</p>	<p>○ラストがやや唐突で納得感に乏しい。主人公の決断の重大さが伝わりづらい。</p> <p>○登場人物の動機や心境の変化が少し読み取りにくい場面があり、勿体ないという印象だった。</p> <p>○姉妹ともに光秀により人生を翻弄されるわけであるが、光秀はなぜ妹を殺せば本願が成就すると考えたのか、はっきりと示されていない。</p> <p>○踊りのシーンについて、やけにあっさりしていた。全体的に丁寧な表現なのに、このほかにもハイライトが盛り上がり欠ける。</p>
傾国老人	<p>○筆跡鑑定者の話であるが、この作品の主題は「家族の愛」ではないかと思う。家族関係が上手に描かれていると思った。</p> <p>○聡明で明るいキャラクターが大変魅力的で、光を射していた。日常の心温まるやり取りの部分が特に良かった。</p> <p>○逆転勝訴した部分の描写は、予想は付いていたものの、それでも感動してしまった。</p> <p>○書き出しが魅力的で、読書意欲が刺激される。</p> <p>○「傾国老人」というタイトルには、想像力をかきたてられ、興味を惹きつけられる味わい深さがあると感じた。</p> <p>○筆跡鑑定や裁判のこと等、よく調べられていると感じた。</p>	<p>○依頼された事件が、場所、経緯など実在の有名事件をモデルとしていると分かる。そうすると事件自体、あれをなぞっただけと思ってしまう。なぞらないでオリジナルの事件の方が良いと思う。</p> <p>○クライマックスがもっと盛り上がって良いのではないだろうか。淡々と進んでゆき終わった。非常に魅力的な作品で、胸を打つ作品になりそうと思うのだが、勿体ない。</p> <p>○人物に関して書込みが足りないためか、納得できない部分が多かった。</p> <p>○題材は興味深かったもので、より読者に伝えようという意識を持って書いて欲しかった。</p>
恋とコーヒーと不意の逢	<p>○安保闘争等、学生運動が次第に過去のものとなっていくつつある現代に、当時の雰囲気を感じさせるテーマでお話を作られた点は、とても良かったのではないかと思う。</p> <p>○どこかアンニュイな雰囲気の漂う文章で、独特な魅力のある文章と感じた。学生運動が盛んだったころの混沌と熱気が独特な文体でカバーされていた。</p> <p>○「若者のいつもと変わらない4日間を書く」という視点は面白いと思う。</p>	<p>○昭和の大学闘争と恋愛と演劇とを扱った作品。いずれも興味深いテーマ。ただ、いずれも扱い方が少しずつという印象があり、結局この作品を通して作者が何を読者に感じさせたかったのか、今ひとつ読みとることができなかった。</p> <p>○時代が違うので、知らない人にも伝わる様に、もう少しそのころの背景を思い浮かべやすい表現、描写が欲しかった。</p> <p>○登場人物一人一人に深みがないため、会話なども作中人物同士は楽しくやりとりしているが、読者を置いてきぼりにしている感じがかった。もう少しキャラの性格や背景、それぞれの良い部分が感じられると良かったと思う。</p>
御幸町ウエディングロード	<p>○題名に惹かれた。「御幸町」という地名を取るところにセンスを感じた。幸せを感じる内容を想像して読み始めた。</p> <p>○マイノリティを取り上げ描かれているが、これからの時代に広めていきたいと思う価値観であり、それを押し付けがましくなく表現していた。</p> <p>○結婚にまつわる様々な問題や同性同士の恋愛など、重くなりがちなエピソードを、決して軽く扱うのではなく、しかし前向きに力強く描いているのも良かった。明るい気持ちにしてもらえた。</p> <p>○市役所に届を出すシーンは感動的。</p> <p>○お仕事小説としても恋愛小説としても読みやすく、面白い。幸福感に満ちており、ロマンティックだった。</p>	<p>○最初の、不倫相手とのやりとりの場面が、この物語のはじまりとしては似つかわしくないように思えた。主人公が新たな恋に踏み出す最後の場面につながっていることも、月のエピソードが物語中に活きていることも分かる。しかし、これでは少々安直で、浮いた場面になってしまっている印象だった。主人公の心のありようや性格を描き、物語の世界観を生み出す部分であったから、より相応しく、丁寧に、書き込んで欲しかった。</p> <p>○ロマンティックなところは良さだが、少々御都合主義のように感じてしまう。主人公の過去をもう少し掘り下げ、なぜ自分のことを欠けた存在と感じ続けていたのか、や婚約者が失踪したときの感情をもっと詳しく書くと良かったかもしれない。</p>
子雀の行方	<p>○和歌を所々に配し、その場面と主人公の心情とが立体的にうまく表現されていると感じた。</p> <p>○文中での風景描写に優れ、文字を追うごとにその光景が自然に目に浮かんだ。</p> <p>○複雑な人間関係を分かりやすく的確に場面ごとに配して、特に帝の寵姫と「通じる」という「手痛い裏切り」にあった場面の主人公の悲嘆にくれる様と、その心理描写に思わず目頭が熱くなった。</p> <p>○主人公の周囲で立ち回る「黒い影」と光の「輝かしい光とそこに群がる明るいものたち」この2面対比が絶妙だった。</p>	<p>○ストーリー展開が単調なのが少し気になった。全体として『源氏物語』の原作のプロットをなぞる以上のことができていない。クライマックスの付近には見せ場となる印象的な場面が一つは欲しい。</p> <p>○光の心の機微や人しれず抱く深い悩みなどがあれば知りたいと思ったし、もっと深い光の人物像、人間性を描写すると良いと感じた。</p> <p>○幾つかの光と主人公との象徴的なエピソードが描かれないことには、主人公の感情は読者の心に刺さってこない。</p> <p>○古典に明るくない人は読みにくいかもしれないと思った。少し解説を入れると良いかもしれない。</p>
右近少将源佑成の事件簿 昏迷の薬	<p>○藤原家の政治的な動きや、敵との戦い、姫との恋愛など王朝物の王道要素が詰まっている。</p> <p>○主人公が、等身大の青年らしく好感が持てた。都の夜回りだけが趣味で日々を漫然と過ごすだけだったのが、誰かを守りたいと思えるまでに成長するところが良い。</p> <p>○平安京を舞台としながら、その時代その世界を生きる人々の姿がいきいきと描かれている。非常に読み心地が良く、キャラの会話の掛け合いも良い具合で、読み進めるのが楽しかった。</p> <p>○主人公のこの先の事件解決や次の恋愛の様子をぜひ続編で読みたい。</p>	<p>○タイトルが少し長く、凡庸で、「事件簿」という割にはハラハラドキドキがあまりなかった。</p> <p>○木の上に姫がいる、かつその姫が落ちて来て、貴公子と出会うというのはありきたり。新しい着眼点が欲しい。</p> <p>○時代物ということと、人物の名前が難しくさらに登場人物も多く、相関図が複雑すぎて分かりづらい。</p> <p>○会話文が現代小説のそのような感じがした。この時代の人がこんなに打ち解けて話すか？と疑問を持った。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
三十年目の約束	<p>○時間が経つごとに季節のお菓子が登場し、そこから時間の経過や季節の変化を読み取ることができた。京菓子の描写がとても秀逸で、京菓子の優美さ、繊細さが余すところなく表現されている。</p> <p>○主人公の人物像がよく描けている。一見異常とも言える菓子への執念も、クライマックスにおいては『夢の通り路』（という名の菓子）の開発という形を取ることで純粋な愛情として昇華されており読後感が良い。</p> <p>○1文目からとてもわくわくしながら読んだ。短くまとめられていて、とても読みやすく感じた。続きを読みたいと思った。</p> <p>○結末も心が軽くなるような、自分も前を向きたくなる締めくくりで、すっきりした心持ちになれて良かった。</p>	<p>○ストーリーに抑揚があまりなかった。</p> <p>○主人公の周辺人物について描写不足が目立つ。どの人物についても、物語の進行に必要な設定以上のパーソナリティや心境が描かれていないため平板で魅力に欠ける。</p> <p>○作品後半の宇治橋のシーンは、本作の核になる重要なクライマックスシーンにも関わらず、宇治橋周辺の情景描写に乏しいため、印象に残りづらい。</p> <p>○京都という都市や作中の時代背景など、作品世界内における時間・空間的描写に乏しい。</p>
しゅもぢすり	<p>○仕事や現実に嫌気がさした人は、この主人公のように、ぶらっと全て放って何処かへ行ってみたいと夢想しているだろう。ただ、現実的にはそれはなかなか叶わない。そういう、読み手のやりたいことを叶えてくれる側面のある小説で、読んでいて面白く感じられた。</p> <p>○京都の外部から来た人物が京都の内部で変容するという構造は非常に興味深いものだった。主人公の心情の機微が直接的に表現されていて、読んでいて感情がストレートに伝わってきた。</p> <p>○文章に勢いがある。若い女性の心の中をそのまま読んでいよう。「たおやめぶり」な作品。</p> <p>○終盤が非常に良かった。作者と主人公の距離感がちょうど良い。</p>	<p>○不倫というテーマを書くのは大変。どこまで共感させられるか、それは登場人物の像をしっかりと表現できているかどうかだと思う。その点では、いまひとつ伝わらなかった。</p> <p>○不倫相手から縁を切って成長するのがテーマなら、不倫相手との関係からきちんと話を書くべき。読み手が物語に入りこめないまま主人公が勝手に別れ、勝手にすっきりしている状態。</p> <p>○京都の風景や建造物から本当の自分の心と現実に向き合う点を、詳細に深く描くと良いと思った。</p> <p>○セリフや心の声で場面を表現するという手法ばかりで、読んでいて飽きがちに思う。</p>
十六年の悪逆	<p>○戦国時代から秀吉、家康の時代へと続く激動を生きる人々の価値観が丁寧に描写されている。</p> <p>○河川開墾から高瀬川運河の日々、了以の人柄と強い信念が、余すところなく表現されている。</p> <p>○河川開墾シーンや処刑前の緊迫した場面など、筆者の筆力を感じさせる。織田の比叡山焼き討ちのシーンは、まさに圧巻で、瞬きをも憚られるほどの迫力があった。</p> <p>○史実に基づく入念な調査と時代考証がされており、丁寧に構成された素晴らしい作品であると思う。</p> <p>○京都の寺社が持つ意味を改めて大切に感じた。</p>	<p>○登場人物が多く、その幼名と元服後の名前、家系の関係と、その人物相関を読み進めながら組立て、理解するのに少々時間を要した。</p> <p>○関白秀次の切腹及びその家族の処刑を物語の中心に据え、その波に翻弄される周辺人物を描こうとしていると思われるが、心情描写が不十分で読者には伝わってこない。ここが伝わらないと最後まで焦点がぼやけたまま終わってしまう。</p> <p>○クライマックスシーンの描写が分量、質ともに不足の感がある。中盤までの丁寧な描写が結部の盛り上がりには生かされなかったことは非常に勿体ない。</p> <p>○セリフが少し大きすぎるように思った。人物のキャラクター設定が一貫しておらず、誰の発言が分かりにくい部分があった。</p>
しるひとは、しるぞかし	<p>○話の冒頭に古典作品の抜粋があり物語が始まる書き方が素敵だと思った。</p> <p>○キャラクターが魅力的だった。カラフルで漂々とした人物、預けられていた身として中ぶらりんの状態の中、書くことで己を形成したであろう人物、ストーリーテラーでありながらその信頼を最後に軽やかに突き崩してみせる人物。三者三様で、それぞれ子供、思春期、大人と違う視点を介して描き出される京都は、日常の中に摩訶不思議をはらんでいて面白かった。</p> <p>○文章の表現力が豊か。想像力を喚起させられる。</p> <p>○登場人物も話の内容も、不可思議で愛らしくて、読んでいて心地良くなる物語だった。</p>	<p>○古い文化への敬意が怪異という形で現れているが、全体を通してこれが寄与している部分はあまり多くないように感じられる。</p> <p>○4話より急に「大学」を舞台にした感が強まり、浮世離れた雰囲気気が薄れてしまったように思った。</p> <p>○正直なところおちが分からなかった。どう受け取ったらいいか戸惑ってしまった。文章自体は読みやすい、かつキャラクターは非常に魅力的なのだが、雲をつかむように読み終わってしまった。不思議な出来事がしばしば起こる、この不思議な出来事は出来事で良いと思うのだが、作者はこういうことが伝えたいのだなあと感じさせる部分が分からなかった。</p>
世界を車窓から	<p>○人物と人物の出会い方が自然。登場人物の性格が分かりやすい。登場人物たちのふれあいが、非常に効果的かつ象徴的に描かれている。</p> <p>○生きること、成長のプロセス、人生を見つめ直す主人公の様子が入念に書かれている。</p> <p>○電車と料理の描写が丁寧に分かりやすい。電車を通じて京都の街と風景が伝わってくる。</p> <p>○話に盛り上がりや事件はないが、静かに流れる時が感じられ京都の電車の音が聞こえてくるような詩的なお話。LGBTQの登場人物が複数登場するが上手く描かれている。情景描写と心情描写が美しく、作者自身の優しさを感じた。</p>	<p>○時間軸が行ったり来たりしていて、不自然さを感じる箇所がある。場面転換が唐突。場面の切り替わりはせめてもう少しだけでもはっきりさせた方が良い。</p> <p>○京都である必然性が感じられない。発端に、両親の住む岡山に少しでも近いところで働きたい、とあるのだから、住居だって同様だろう。転職先を京都に設定しておけば何の無理もないのではなかった。</p> <p>○人物の性格や言動が不一致に思う。</p> <p>○タイトルから、違った話を想像してしまう。車窓、嵐電の一番前の場所がキーになっていると思うので、そこは活かしつつ、京都の嵐電が舞台だからこその名前であると良いなど感じる。</p>
たそがれにかぎりの立つ見えて	<p>○日常である高齢社会の問題を崖の下を使った非日常で描こうとされた点に好感を持った。「崖の下」に作り出された世界が独特で、興味深かった。</p> <p>○京都を模した京都の別世界が舞台となっていて、ここは一体どこなんだろうと思わせる怖い小説だった。独特の世界観を作るのがとても上手い。</p> <p>○作品の構成に無駄がなく、一気に読み込んでしまった。文章力なども群を抜いて良いと思った。</p> <p>○情景描写など、人生を感じさせる文章表現に優れており、それが老後や死というテーマとマッチしている。</p> <p>○介護問題への提起をしっかりとしている。</p>	<p>○最初の2、30ページは不要、または、物語が進行していくうえで小出しにしていった方が良かったと思う。</p> <p>○対立として分かりやすかったのだが、それでも宗教観が強いと思った。その場面を少し短くするなどすると読んでいて拒否感なく作品の一部として宗教観を受け取れるだろう。</p> <p>○一つの場面が長すぎる回想や思索部分によって混乱してしまうほどに分断されていたり、似通った内容のことを場面を変えて何度も繰り返していたりと、読みにくさくどさを感じた。</p> <p>○全体的に暗く、読み終わっても爽快感はなく、人に薦めたい小説かどうか判断に迷ってしまう。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
月並み姉妹	<p>○双子の姉妹のネーミングと性格設定がよく考えられている。月に例える表現力が上手い。</p> <p>○多くの作品の引用、著者の例などが出てきて面白い。</p> <p>○登場人物が少ないのに丁寧にまとまっている。それぞれの性格も分かりやすく感情移入しやすい。文章力、表現力ともに力がある。</p> <p>○京都のお寺に嫁いだ嫁の苦労エピソードがリアルで面白い。姑や檀家のねっとりした陰険さも京都独特の文化、京言葉で表現されている。</p> <p>○共感のしやすさとテンポの良さが相まって、非常に読みやすい作品に仕上がっていた。</p>	<p>○全体的に設定に無理が多い。少し独りよがりの。山場である妊娠をさらに越えて、月並み姉妹がどうなるのかまで書かないと中途半端感が残った。</p> <p>○姉と妹が入れ替わるという展開は新鮮で面白いが、その意義がいまひとつ感じられなかった。描きたいテーマのためにその展開が不可欠というようには感じられない。</p> <p>○物語の流れ全体に、起伏が足りないように感じた。起伏が大きくない物語を書くのであれば、もっと精緻な描写が必要である。</p> <p>○少し引用する小説の数を絞っても良いのではないかと思う。</p>
月の船星の林	<p>○物語の最後にタイトルの意味が分かるのが良い。腑に落ちる。</p> <p>○義経が天狗に剣道指南を受けた伝説をモチーフにしたものだが、あやかし・森の神秘的な雰囲気や透明感のある少年、義経の美しさをひき立てている。</p> <p>○もののけと人間の共存、そして友情をテーマに京都という場所も無理にねじ込んだ感じもなく、自然にちょうどよい感じで描かれていた。</p> <p>○最後に、全員が前を向いて歩き出せるところがよい。余韻の残る、良い終わり方だと思う。</p> <p>○キャラクター（鳥）が格好良い。登場人物のカリスマ性もあり、入っていきやすく、風景などが想像できて、読みやすい作品だった。</p>	<p>○源平合戦という前例作品の多い内容を扱っているだけに、あともうひとひねり何かが欲しい気がした。</p> <p>○鹿乃介の強さの秘密が知りたい。義経が驚くような強さで、苦労もしているようなので、もう少し過去をクローズアップして欲しい。</p> <p>○歴史小説に詳しくない読者でも、遮那王や鳥、正近の立場が伝わりやすいようにより詳しく説明を書いてもらえたら、余計多くの読者に楽しんで読んでもらえる作品になるように感じた。</p> <p>○すっきりまとまっていて文章もとても読み易かったが、例えば禿退治に町においていた時の遮那王のエピソードや、正近と出会い立ての頃の様子や、幼い頃の母親や清盛との間のエピソードなども加わっていると個人的には読みごたえがあって面白そうだと思う。</p>
定家始末記	<p>○読んでみると、まさに定家とここに描かれている好きなことには全力を注ぎ嫌いなことからは何とか逃げようとする子どもっぽくも愛すべき人柄の彼と、行動を共にしている気分になった。</p> <p>○平安京の下級貴族の定家の生活の様子が分かりやすく目に浮かぶよう。平安京の日常が（本当でないにしろ）実感できて面白い。</p> <p>○平安時代が舞台ではあるが、会話が完全に現代の関西弁などで、歴史小説と思って壁を作る必要がなく読むことができる。</p> <p>○この作品の良いところは登場人物のキャラクター性と文章の軽やかさだと思う。</p>	<p>○ほのぼのとしてこれはこれで良いのかもしれないが、何か山場があって欲しいと思った。結末もまだ何か続くのではないかと期待してしまっただけ、もう少し構成に工夫が必要かもしれない。</p> <p>○定家という人物の一面は面白いのだが歴史に残る素晴らしい歌人という説得力が欠けているように思った。</p> <p>○平安時代が舞台でありながら、会話が完全に今の時代の関西弁なのが、違和感を持たないでもなかった。</p> <p>○タイトルも文章も必要なことを表しただけの淡々としたもので、面白味や、想像をかきたてるような余白に欠けていた。</p>
毒を食らわば	<p>○登場人物たちの関係性、窯元の店主夫婦やスペイン料理店にまつわる問題の解決に至るエピソードなど、この物語の世界観はとにかく優しくて、心が温まった。</p> <p>○テンポ良い会話のやり取りが面白い。地の文がなくても会話文だけでも話としては進んでいきそう。</p> <p>○「次の皿に次のストーリーが書いてある」という発想は面白い。</p> <p>○手の込んだ良くてできた作品だというのが読み終わった後の感想である。下調べにも非常に時間がかかったのではないだろうか。伏線を余すところなく引き、全て回収するような切れ味の良さがある。</p>	<p>○話の内容と長さにしては登場人物が多くて、一人一人のキャラクターが描ききれていない。もう少し絞っても良いのではと思う。そのせいで本筋が最初よく分からなかった。</p> <p>○確かに関西弁ではあるが、舞台が大阪であってもおかしくはない。</p> <p>○この小説全体のテンポとクセのある地の文と会話文は、慣れればこの作者のオリジナリティであり唯一無二の武器でもあるが、合わない人には合わないと感じた。</p>
はちみつレモン	<p>○起承転結が鮮やかで、主人公と登場人物との出会いから絆が育まれ、別れを迎えるまでの過程の描写をはじめ、理想の友人の家族の現実に直面する場面、自分の弟が主人公達のライブを通じて声を取り戻す場面など、数多くの出会いと別れや、今まであったものが壊されて新しいものが生まれていくまでの流れが見事としか言いようがない。</p> <p>○思春期特有の葛藤が、上手く表現されている。自分らしさや親からの抑圧に苦しみ、そんな中だからこそ自分のなりたい理想像に憧れ、他人に対して斜に構えて冷めた目で見下してしまう。自分にも覚えのあるあの頃感覚が緻密に表されていて、主人公の目線に自然と寄り添うことができた。</p> <p>○京都の情景を表現するのがとても上手だと感じた。</p>	<p>○自分の殻を破る、女性差別についてなど、様々なテーマが盛り込まれていたが「女性差別」について主人公がかなり熱く語る割には最後に上手くまとめきれていない。テーマが多すぎるかもしれない。</p> <p>○母と娘の葛藤が書きたいのかもしれないが、母親像が分からないのでちぐはぐな感じしか残らなかった。</p> <p>○異性で好きな相手がいた時には、少しだけ肩すかしな気分だった。</p> <p>○2人の今後については、読者の想像力にゆだねて欲しい。</p>
東ドイツカメラ専門店	<p>○「京都×町屋×カメラ×女子校生」の組み合わせが新鮮。</p> <p>○場面の数、サブニングの数も多く、主人公と登場人物の関係性の変化をそれぞれの場面から読みとることができた。</p> <p>○全体的に読みやすい文体だった。語学や知識が豊富で、特に主人公のカメラの説明の文章は読みがいがあった。</p> <p>○思春期の男女の友情を深く鮮やかに描き出している。</p> <p>○たくさんの人間関係の中で一生懸命な主人公の姿を見ていて、応援したくなった。支える友人や周囲の大人も魅力的。</p>	<p>○タイトルが物語の魅力を生かし切れておらず、味気ない気がする。もう一捻りあっても良いような気がする。</p> <p>○全体的に物語に合わせて人物を動かしている印象。</p> <p>○物語のラストの文体が大人びていてそれまでの一人称の文体と少しズレているように思う。</p> <p>○2人の幼馴染の絆になるような具体的なエピソードが入っていらもっと共感できた。</p> <p>○もう少しそれぞれのキャラクター像を膨らまして欲しかった。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
CJUNP 講	<p>○「意識の流れ」風の文体は、中学3年生の多感な内面を見事に捕らえている。</p> <p>○次々と想起されるエピソードや想念は、ランダムのように、よく計算され自然な流れにのっている。</p> <p>○ごくありふれた日常がはらむ危機感や不穏な気分が見事に描かれている。</p> <p>○独特な言い回しや表現が作風をより個性的なものに演出している。</p> <p>○タイトルもさりげなくて、作品にふさわしい象徴となっている。</p> <p>○一文が長すぎる。長すぎるのだけど、そこが面白いとさえ思ってしまう。中学生の主人公の頭の中。整理されないままつらつらと述べられるとりとめもない考え。なぜか魅力的。</p>	<p>○日常生活のただらした様子や主人公が感じたことを羅列しているだけで、作品から訴えかけるテーマや作者からのメッセージを感じない。</p> <p>○独特の語り口調は良いのだが、話に脱線が多くその脱線話がさらに長く、読んでいる読者を置いてきぼりにしている。話の本筋が見えなくなることが多い。</p> <p>○主人公がどこにでもいそうな少年であるだけに、多くの読者が彼の語りにも共感を覚えやすいであろうし、そのゆえに読者はその共感に支えられてなんとなくページを追っていきけるであろうものの、追ったところで読者には何も残らない。</p> <p>○とにかく「読みにくい」。句読点が少なく、一文が長く、文章をもう少し短くする工夫が欲しい。緩急が欲しい。</p>
伏見参拝	<p>○スタンリン・エイン『特別料理』のオマージュ作品はたくさんあるが、あえて江戸時代の京都を舞台にしたうえでエイリアンを持ち出すところに諧謔味を感じる。</p> <p>○話の流れに濃みがなく、読みやすかった。</p> <p>○よそ者に冷たく、夜の闇は暗く、異界と通じていてもおかしくないとさせる奇怪な地という印象は違和感なく受け入れられる。</p> <p>○この作品の大変素晴らしいところは、心理描写が簡潔で鋭く、説得力を持っているところ。人の暗部を描き出す力が本当に見事。</p>	<p>○こわい話なのに、鬼気迫るものがない。</p> <p>○内容にクセがあるのにも関わらず、それが全く反映されていない題名であることが残念である。もっと他に多くの人の興味を引くこの作品に適切な題名があると思う。</p> <p>○いくつかの主要な固有名詞以外、京都を感じさせるものがない。</p> <p>○主人公がどっつつかずだったり、方言を使うことから逃げているような感じがしたり、安易な表現を多用したり、というところが気になった。</p>
平安京の人魚	<p>○人魚にまつわるエピソードとアイデアが面白く、読み終わった後も心に焼きついている。</p> <p>○設定がしっかりと作り込まれているので、嘘っぽい要素がない。</p> <p>○気付いたら全てがつながっていて、謎解きの終盤はカタルシスがあった。</p> <p>○辻占をきっかけに、たくさんの登場人物が様々な場所でそれぞれつながりながら物語をつむいでいく、その展開の仕方が見事だった。</p> <p>○事件の動機から展開されるエモーショナルなシーンが上手い。段違いに表現力が高いと感じた。</p>	<p>○連続殺人事件の構図が洗練されていないため、ミステリとしては中途半端。捜査小説としては、真相の方から近づいてくる感じがあり、フーダニットにしては証拠が杜撰、ホワイダニットにしては事前に説明が多いため切れ味に欠ける。</p> <p>○会話が複数で行われているところが分かりづらかった。一対一にしてスマートにすべきかと思う。「」を使わないのも気になった。</p> <p>○書式に問題があるとそれだけで評価が下がる。素敵な作品なのに勿体ない。</p> <p>○慣れないと読むのが難解な作風だった。文字を追うのに精一杯で、内容が頭に入ってこない部分も多く残念だった。</p>
ぼ・ぎーる西陣	<p>○全体的に読みやすい文章だった。京都で話題になっている古民家再生やリフォーム、アートプロジェクトなどの分野について知識と語彙が豊富であると感じた。</p> <p>○アートを通して、登場人物の心の成長が感じられ、京都で活動する作家や工芸品に興味を持てる。アートプロジェクトが成功しそうな希望を感じさせる結末も、心地良かった。</p> <p>○各登場人物の視点から「ぼ・ぎーる西陣」に対する思いを章ごとに展開する手法が良い。伏線の回収が上手で、登場人物が増えてもテーマが分散しにくい。読んでいて分かりやすい。</p> <p>○人間模様の描き方がとてもリアルで、群像劇を観ているかのようだった。</p>	<p>○「ぼ・ぎーる西陣」の名前の由来がないように思う。あった方が良かった。</p> <p>○主人公を再起させるアートプロジェクトについて、もう少し丁寧な描写が欲しいと感じた。</p> <p>○シリアスなシーン、そうでないシーンの書き分けができたらもっと読みがいのある作品になると感じた。</p> <p>○物語に主人公が必要かどうかは置いておいて、この物語の主人公、登場人物達の着地点が分からず消化不良。主人公が「ぼ・ぎーる西陣」ということなのか。それだと感情の持って行き場がない。面白いけど、消化不良。それぞれ魅力的なので、他を削ってもっと書いて欲しかった。</p>
本阿弥異聞	<p>○読み手にとって胸が締め付けられるような悲しみと驚きとそして、静寂と優美さ。これらが混ざり合って、とても奥深い世界観を見事に表現していると思う。</p> <p>○主人公の捻じれた感情や欲望にはある種の凄味と卑小な人間臭さが同居しており、奇妙な魅力がある。また、主人公の周囲を固める女性もそれぞれ非常に個性的である。内面に抱える憎悪や愛情、信仰などの感情が強烈でその切実さも伝わってくる。</p> <p>○書法、和歌巻、茶碗など、芸術作品の意匠についての描写が圧倒的なボリュームで、作者の教養を感じさせると共に、主人公が芸術に捧げる熱意に説得力を持たせることに成功している。</p> <p>○京都の歴史を様々な視点から学べる貴重な作品だと思った。</p>	<p>○小説の焦点部分が複数あり、読者はどこの焦点に合わせていけばよいのかが分からない。</p> <p>○「あともう少し読みたい」というところでエピソードがあっさり終わるので、もう少し構成を練っても良かったのではないかと思った。「深き縁」の和歌巻のくだりも素敵だったので、もう少し掘り下げて描写して欲しかった。</p> <p>○主人公の人生の描き方が内容として薄いと思った。なぜ興味対象が移るのかといった心境を書いて欲しかった。主人公と周囲の人物との交流の描き方ももう少し詳しく書いて欲しかった。</p> <p>○もう少しふりがなが多いとより一層読みやすくなると思った。</p>
「舞え舞えかたつむり」―白拍子・暁星の明けない夜はない?―	<p>○華やかなだけでなく、当時の京都の庶民(白拍子、くづつ師等の芸能者)の様子など、よく調べられており、リアリティがある。</p> <p>○主人公の性格もあっけらかんとして親しみやすく、周りのキャラクターもそれぞれ個性がはっきりしており、読み進めていて楽しかった。また、対立している人物も個性的で面白い。けばけばしい華嚴の君や、下心ありありの左大臣など、良い具合に話のスパイスになっていた。</p> <p>○少女の葛藤と心理的な成長を描く場面が、特に面白い。物語のその後が気になる終わり方であった。</p> <p>○文体は軽いのが、時代背景や着物の素材、質感、風格がほど良く書かれていて、イメージをふくらませながら読むことができた。</p>	<p>○困った時にいつも助けてくれる登場人物が、話に唐突に絡んでくることが多い印象を受けた。もっと彼らと主人公がやりとりしている様子を描写してもらえたら、主人公を救う際の説得力が増すような気がする。</p> <p>○主人公が14才にしては幼い印象がある。当時は、女子は12、3才で裳着があった上、両親が亡くなって白拍子という職についてるのであれば、もっと大人びていると思う。</p> <p>○最後の主人公の成長について、もう少し強いイメージのエピソードがあればより良い</p> <p>○主人公はずごくかわいくて、がんばれー!と応援したくなるキャラクターが良いが、文学作品となると自省や内面の語りがもう少しあっても良いと思う。</p>



タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
室町風姿伝	<p>○作者には何より筆力があり、冒頭の田楽のシーン・棧敷崩落とその後の展開は冒頭から動きのあるシーンを頭を持ってきてズバツと読者を物語の世界に引き入れる内容で、特に第1話は読者を惹きつけ、一瞬で読み終わった。</p> <p>○明快な構成が読みやすい。章ごとに別の人物の視点を採用しているながらも、各章の人物や内容が相互に関連し合っ最終的には一つの物語として浮かび上がってくる巧みな仕掛けは評価に値する。</p> <p>○第3話では、根底に渦巻く「南北朝合一」の大義をベースに練り広げられる謀略と刹那、愛欲を見事なまでに自然な形で表現している。とてもよくまとまっており、登場人物の家系や人間関係の把握も容易で読後感のとても良いものであった。</p>	<p>○セリフや状況描写が説明口調で面白さに欠ける。</p> <p>○3章に分かれており、それぞれに別の主人公がいる作りになっている関係上、特定の人物に肩入れしながら読むということがしづらい。</p> <p>○登場人物が外見でしか特徴づけられておらず、人物としてやや弱く感じた。もう少しその人の信念や性格にもスポットライトを当てて欲しかった。</p> <p>○情景の描写をもう少し具体的に書くとなお良いと思う。</p>
料理人	<p>○細かくはないが、必要十分な心情表現もされていて、料理対決のシーンなどは特に上手く、主人公の冷静さの中に隠れていた情熱に惹きつけられた。物語の展開も無理が無く、ヒロインの心象風景にもすんなりと入っていきける。</p> <p>○文語調で淡々とした語り口が新鮮で心地良い。きわめて静かに語られていくのに、不思議と彼女に感情移入してしまう。文体のテンポも非常に良く、普段から自身の文体を作ることの工夫を凝らされているのだと思った。</p> <p>○食・京都、どちらに対しても入念な下調べのあることがありありと伝わってくる。</p> <p>○辰年生まれから龍に掛けて、龍の耳で響となす、相国寺の鳴き龍を着地点とする構成はまさに画龍点睛の感である。</p>	<p>○料理の話がメインで、響であることのハンデや苦労話もあまり伝わってこない。彼女の一生を描ききれておらず、作者が伝えたかったことがぼやけている。</p> <p>○物語がキレイすぎて新鮮味も面白みもなかった。挫折も将来も結婚も悩む割にその章で解決して読みやすいがつまらない。</p> <p>○登場人物の心理描写が、ほとんど地の文だけで語られているため、客観的な事実だけがただ時系列で並べられているように感じられ、能動的に人物らの胸中を押し量る楽しみを持てなかった。もっと対話を入れて欲しかった。</p> <p>○京都の情景描写の精緻さは舌を巻く水準であるが、終始そのような描写が続き、せつかくの圧倒的な情景描写が、何のためのものであるのかがぼやけてしまうと思われた。</p>
ルーシー・イン・ザ・スカイ	<p>○ブラック企業や社内いじめなど闇の部分を描き、そういった心の隙間に宗教や薬が絡んでくるのは、とても面白い。</p> <p>○現代の会社勤めの方の多くが、多かれ少なかれ抱えていると考えられる閉塞感を浮き彫りにしているため、共感を集めやすいと思う。</p> <p>○教団の宗教活動の表現が生々しく恐怖心を煽る。主人公が教団の重要ポストにじわじわと上っていく様子が丁寧で上手。宗教がきっかけで生きる力と喜びを得る様子に引き込まれていった。</p> <p>○主人公の目線を通して過酷な損保会社の仕事内容がよく分かった。厳しい職場環境で精神をコントロールできず宗教に入っていく様子がリアルに描けている。</p> <p>○迫力があり、手に汗握るところなど、ハラハラ、ドキドキのとり入れ方は上手だと思う。</p>	<p>○新興宗教がテーマで、ラストまで既視感が拭えなかった。理不尽に不幸な目に遭わされている人へのメッセージ作品と受け取れるが、もう少し突っ込んだ内容まで書いて欲しかった。</p> <p>○京都を舞台にする必然性が感じられない。京都こそは日本一の宗教都市であり、パワー・スポットや魔界に満ちている。新興宗教を題材とするのなら、この特性を活用しない手はないだろう。</p> <p>○会話文だけで進むところが多く、誰が喋っているか分かりにくい。間に人物の動作を入れるなどの読者を想定した工夫が欲しい。</p> <p>○全体に描写が大仰すぎると思った。もう少し抑え気味に、じわじわと緊張感を高めていく方が読者を引き込めるだろう。</p>